研究・教育の越境に向けて
――コメントと感想――

北　原　かな子

グローバル化が進む中で、さまざまな研究分野において、従来の地域枠にとらわれない研究方法が志向･模索されるようになっている。本シンポジウムのパネリストは、中世文学、近代文学、言語教育、科学史、とそれぞれに異なった分野からの発表であり、たいへん興味深く拝聴した。私自身は学部時代に音楽を専攻したのち、大学院国際文化研究科で近代文明開化期の地方における西洋文化受容の問題に取り組んだ。大学院終了後もその研究を継続するとともに、青森県史編纂の仕事や、女性史関連、および洋楽受容関係の研究に従事している。今回のシンポジウムでは、コメンテータとして、こうした自分自身の研究背景に基づきつつ、各発表者の講演を拝聴した。

アンドレア・ククリンスキ氏の発表は、中世文学研究の立場からグローバル化の時代への提言である。中世文学の日独比較に基づき、日本近代化の中で始まった文化交流により平家物語の捉え方がかわったこと、新しい研究として「平家物語」とミンネザングの比較研究が出てきていることなど、興味深い事例を引きながらの内容であった。特に、叙事詩である平家物語のパフォーマンス性に注目する事で、ミンネザングとの比較研究が生まれたとの紹介では、私自身が現在科研費を得て取り組んでいる研究（「弘前藩における「音」文化の成立及び「楽」思想の形成と近代への展開」挑戦的萌芽研究、研究課題番号 23652159）との関連を想起した。弘前藩には藩政期に平曲が伝わり、武士階級である楠美家が平曲伝承を家業として伝えた。この楠美家を出自とする館山漸之進は明治の近代化とともに邦楽が廃れるのを憂えて、政府に数度直訴することで、明治前期に西洋音楽一辺倒だった東京音楽学校に邦楽調査掛設置のきっかけを作った。東京音楽学校に邦楽調査掛ができたのは、日本の近代音楽史上で大きな意味を持つが、その原動力は弘前の平曲伝承者だった。そして平曲は現代でも伝承され、演奏されている。これに対して、ミンネザング（あるいはミンネゼンガー）はどうなのか、など、さまざまな関心を持ちつつ拝聴した。

ククリンスキ氏は、過去を「異文化」と捉え、過去との対話を異文化との対話と見ることで、グローバル化における異文化理解に資するとする。これは一般化することで「過去」の研究がグローバル化時代にあっても有用性を持つということの再確認にもなる。また、こうした文化の比較研究は、相互の共通性についての理解を深めるとともに、個別性、あるいは独自性の発見にもつながり、グローバル化の時代に即した研究方法論としても興味深いものと思われる。特に外国人研究者が日本の文化について関心を持つことは、日本文化を研究する日本人にとっても有益である。中世のドイツ文学を研究していたククリンスキ氏が、なぜこうした日本の平家物語との比較研究に取り組むようになったか、その契機がドイツの「ニーベルンゲンの歌」を相対化しようとする意図に基づいていたこと、またこうしたスタイルを取る叙事詩が、世界各地で他にも存在するということなど、今後の当該分野における研究の展開を考える上でも貴重な発表であった。

土屋忍氏は、近代文学研究の立場から発表された。グローバル化により、「日本文学」から「日

本語文学」の新概念がでたという指摘は、文学が他の芸術に比しても、言語の問題が大きいことを改めて思わせるものである。それに加えて本発表は、特に村上春樹をケーススタディとして、翻訳の問題に鋭く切り込むものとなった。

翻訳の問題は、作品の持つメッセージ性を真に理解できるかどうか、という本質と関わるだけに、重要であることは言をまたない。たとえば音楽は、作品（音）にダイレクトに接することが可能である。しかしそれが果たして、その作品の持つメッセージ性を本当に享受できているかどうか、については、慎重にするべきではないかと、言語を主なツールとする芸術である文学に関する本発表を拝聴しながら感じた。

言語を使って自分のメッセージを表現する場合、本来の母語とは必ずしも一致しないケースもでてくる。たとえば、文明開化期の日本では、東京大学の前身校である東京開成学校でも、お雇い外国人教師により外国語の教科書を使用しての教育が行われた。これは言い換えれば、当時の日本は自国語での高等教育ができなかったという事情が反映されている。この時期に教育を受けた日本人には、本来の母語である日本語以上に教育を受けた外国語の方で読み書きが堪能だった人物が少なくない。会津藩から青森県下北地方の斗南藩に流され、辛酸を嘗め尽くしたのちに陸軍大将にまで上り詰めた柴五郎も、フランス語で教育を受けたことの影響を語っている。お雇い外国人雇用による教育で力をつけた日本人が、自らの高等教育を自国語で行うようになり、外国語と日本語の関係もまた変容した。本発表は、言語をツールとする文学だけに、日本人と外国語を巡る諸問題も想起させる貴重なものであった。

そして、言語を巡る問題は、現代の文学研究にも影響が及ぶ。外国人が日本語を使いこなし、日本文化の研究で成果をあげつつある一方、たとえば日本文学研究を志す外国人が、日本語の文献を読んだ上で、日本語以外で研究論文や著書を書くケースもでてきている。本発表の中では、土屋氏の研究について他国語で書かれたことから、自らの研究に関わることであってもその内容を詳細に把握することが難しいとの事例も紹介された。これはまさにグローバル化の時代の研究状況を巡る諸問題の再認識にもつながるものと考えられよう。

青木アタヤ氏の発表は、親日国として知られるタイでの、日本語を巡る状況についてのものである。タイでは、日本語が受験科目として選択可能になる一方で、ASEAN 経済統合による共通言語の英語、あるいは中国語、韓国語が台頭してくるなど、日本語をめぐるベクトルが複雑になっている。青木氏の発表は、こうした状況をよく理解できるものであった。タイにおける日本語の学習目的が、最初は日本語のコミュニケーションに加えて、漫画、アニメというポップカルチャーが中心だが、高等教育段階になると、就職などの経済的な目的が主となってくるという事実は興味深い。すなわち、将来を日本語にかける若者がいるということであり、日本語あるいは日本側から見るとプラス要素と思われる。日系企業の進出により日本語を扱える現地人の需要は高まっており、今後も日本語学習熱は継続すると期待される一方で、教師の不足等の問題もでてきており、自立学習の重要性や、それに対処する基準作りも国際交流基金により作成されている現状が報告された。

現在私が勤務する青森中央短期大学もタイの大学との交流を進めており、来春の青森中央学院大学看護学部移行にむけての学術交流推進として、先日タイのチュラロンコン大学と交流協定を結んだ。青森中央学院大学にはチュラロンコン大学を初めとしたタイの大学からの留学生が来ており、教える側としては、その留学生たちの日本語力の確かさも実感している。この学生たちは、

幼い頃に日本のアニメーションに接し、その中から単なる娯楽以上に日本の社会についてさまざまなことを学び、それがきっかけで日本の関心を持ち、日本語を学習するようになったという。日本語あるいは日本文化を広める上での、こうしたポップカルチャーの役割も見逃し得ないところと思われる。

本発表は、タイにおける日本文化あるいは日本語習得などの全体的動向についてのものだったが、それに関連した具体的事柄として、青木氏が教鞭をとっていたチュラロンコン大学で日本語を専攻する学生たちの事例も紹介された。学生たちの直接的志望動機は、日系企業への就職が高収入につながると考えていることなどである。また、現在日本各地の大学とタイの大学との交流が進められている背景に、日本側からの積極的働きかけがあることなどが報告され、グローバル化の時代におけるタイおよび東南アジアと日本の位置関係を考える示唆を与える発表となった。

初山高仁氏の発表は、東北大学や国際文化研究科の理念にかかわるものである。東北大学の理念である①「研究第一」、②「門戸開放」、③「実学尊重」のうちの「実学」について、東北大学が意図してきた真の意義及び現代的意義についての発表であった。特に本発表では、慶応義塾と福沢諭吉の例も含めて、「実学」という言葉が持つ意味合いの変化と共に、ともすると誤解されがちなその内容について明らかにしている。その中で初山氏自身が研究されてきた科学史（物理学）の分野における東北大の国際的な位置づけも具体例として示され、現在に至る大学の状況を考える上でも、きわめて興味深い内容であった。

初山氏は、東北大学の歴史の中での「実学」理念が、先行するものに対抗したり、新たなものを進取したりする学問的姿勢を示したとしている。東北帝国大学成立時や 1922 年の法文学部成立時に課題となった「他とは異なる学を担う」という姿勢は、国際文化研究科成立時にもあり、20 年の時を経て、科学史、文化人類学、国際関係論、エイリア・スタディーなどの諸分野における成果検証の必要性を指摘している。

学部を持たない独立研究科ということは、国際文化研究科の特徴の一つである。これは、言い換えるならば、受け入れ学生の出身校、出身国、専門性などさまざまな背景を持った人が集まるということであり、そもそもトランスボーダー的性格を持つということになる。それはすなわち、既存の学問の枠組にとらわれない方向性を志向する可能性に通じる。私自身、学部では音楽を専攻し、国際文化研究科で文明開化期の国際交流の研究に取り組んだ際、かつて音楽を学んだことが、歴史資料を読み込む上で大きなヒントになった経験がある。これに類して初山氏自身も、理学部を終えてから文科系である国際文化研究科で学んだことにより、フレキシブルな姿勢で学問に臨んだこと、そうした環境により、言葉自体は広辞苑にも掲載されている「実学」の、語義の持つ意味合いの、より深い考察に至ったことなどを述べている。こうした初山氏の発表は、国際文化研究科の特色をあらためて想起すると共に、グローバル化の時代の中で、もともとトランスボーダーな性格を持つ国際文化研究科が、今後にむけてどのように体制を継続または立て直していくべきか、その方向性を考えるうえでの示唆に富む貴重な発表であったと思われる。

情報通信網や交通が発達した現在、さまざまな分野でグローバル化が急速に進行している。中世文学の日独比較という視点から、グローバル化の時代における比較研究の可能性を提示したククリンスキ氏、グローバル化の時代であるからこそ、翻訳を含めた言語の問題が重要であることをあらためて認識させた土屋氏、その言語を具体的に習得する上での諸問題を指摘した青木氏、

以上三氏の発表は、研究領域は異なるものの、それぞれの立場からグローバル化の時代における研究のあり方とそれを取り巻く諸状況を明らかにするものであった。そしてそれに続く初山氏の発表は、科学史とグローバル化を考える事例でもある東北大学草創期の様相に加え、国際文化研究科がグローバル化にどう対応できるのか、それを考えるためにも「実学」理念をあらためて問い直そうという指摘するものであった。いずれの発表も根底には一種のフレキシビリティがあり、示唆に富む各発表は、「グローバリズム・日本・国際文化研究」をタイトルとして掲げた本シンポジウムにふさわしい内容であったと思われる。